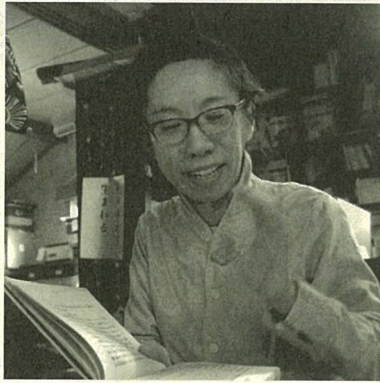


和紙だより

■目次

| | |
|---------------------|---|
| 越前和紙への提言 下中菜穂さん | 1 |
| レポート「紙と戦争」企画展と記念講演会 | 2 |
| 職人探訪 中谷健二さん | 3 |
| 和紙ミニコーナー | 4 |
| 情報欄 | 4 |

越前和紙への提言



■下中 菜穂(しもなか なほ)
1960年千葉県生まれ。東京女子大学文理学部史学科卒業。もんきり研究家。出版業。造形作家。東京造形大学講師。江戸時代の「紋切り遊び」を通して「かたち」に込められた祖先の暮らしや精神を紹介。紋切り遊びの書籍出版や各地でワークショップ、展覧会を開催。中国内陸部の農村やベラルーシなどを訪れ、国内外の今も生きている切り紙の文化や紙遊びを通じて、もう一度蘇らせたい暮らしの心を研究。和紙とセットになった紋切り遊びの本多数、「窓花-中国の切り紙」「背守り練習帖」「たてもの文様帖」(エクスプランテ刊)他、著書「切り紙もんきりあそび」「かたちを贈る」(宝島社)、「こども文様ずかん」(平凡社)など。
エクスプランテ: <http://www007.upp.so-net.ne.jp/xpl/>

■下中菜穂さん(紋切り研究家・出版業) 「紙遊びが開く生活文化の心」

●忘れられた遊び

「紋切り」との出会いには、図書館で手に取った「世界遊戯法大全」(松浦政泰編、明治四十年博文社刊)という本です。この本は、古今東西の様々な遊びを詳細に紹介した本でした。明治と言つても、庶民はまだまだ江戸の延長ですから、西洋の遊びだけでなく、江戸の遊びもかなり入っています。江戸の人は数学の問題を出し合つて遊びにしていたという話もあります。今の私達から見ると勉強や学問と思われる「算術遊戯」等の

非常に知的な遊びも、この本には載っているのです。その中に「紋切り遊び」という項がありました。こんな遊びがあつたのか!という驚きだけでなく、家紋で遊んでいるということ自体も衝撃でした。



職人さんのやることでも面白ければ遊びにしてしまう。当時の風俗画を見ても、七夕飾りや長屋の戸障子に貼つたり、寺子屋でも教えていたようです。昭和の初め頃までは図工の教科書や女学校の教科にも使われていました。私達の祖先は、貧しい生活でも、身近な紙を使って、暮らしの中にささやかな美しさや楽しさを見つけ、知的に遊んでいたわけですね。

●紋の面白さと「型」

家紋は平安時代、個人を見分けるための文様を牛車に付けたことから始まっています。その後、武士が戦の時の敵味方を示す旗印に使用、縁起の良さや願いが紋に込められてきました。分家などで家紋を増やす時に少しずつ形に手を加え、ヴァリエーションを生み、数をどんどん増やしていくその様子は、何か生き物の進化のようにも感じられます。江戸期には、役者や商家、遊女までが暖簾や着物に紋を染め抜き、粋で茶目つ気のある愉快な紋もこの頃沢山作られました。家紋が並んだ紋帖は、まるで博物図鑑のよう。植物、小動物、生活道具、雪や霞などの形のないものまで紋にしています。そのひとつひとつに物語があるかと思うと、謎ときの手帳のようです。「光琳梅」や「対兔」など、言葉で形を表現できるところもすごい!私達の先祖はこのような「かたち」の言葉を持つていたのですね。いろいろな人が描いたり、使ったりしながら淘汰されて来



もんきりの作品

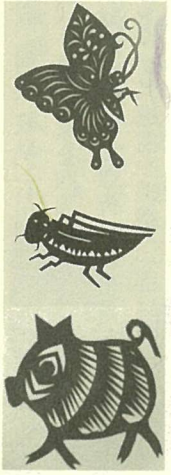
た形だから、紋切り遊びはご先祖様と一緒に共作するみたいな感じがあります。海外の人に日本のことを紹介する時、家紋はとってもいいですよ。

「紋切り」は型紙どおりに切るもので、一見自由度がないように思えますが、同じ型で切り抜いても、却つて作るものに個性が出るように思います。出版した本の型紙は、家紋の原型を出来限り壊さず切り紙として成立するように、作図し直しています。色数も多く、切りやすい小川の機械漉き和紙を使っています。

●紙遊びで発見する暮らしの心

暮らしに今も生きている切り紙のことが知りたくて、文化人類学研究者の丹羽朋子さんと中国内陸部陝西省の黄土高原に暮らす漢族の村で、彼等の美しい切り紙「窓花」をフィールドワークし、本にしました。人々は大地に横穴を掘つて作る住居ヤオトンに暮らし、季節や人生の節目に窓の障子に窓花と呼ばれる赤い切り紙を貼つて彩ります。厳しい暮らしの中で、この赤い切り紙がなかったら、どんなにか寂しいだろうと思いました。私達は何でもとつておこうと考えますが、彼等にとつては、それが傷み、燃えてなくなることが重要なのです。紙はなく

ヤオトンの切り紙



もんきりあそび
こども文様ずかん
たてもの文様帖他は
インターネットでも販売

■「紙と戦争」企画展と記念講演会 明治大学平和教育登戸研究所資料館

旧日本陸軍の秘密戦のための電磁波攻撃、気球爆弾、諜報用小型機器、偽札、毒物・細菌兵器を担当した「第九陸軍技術研究所」（通称「登戸研究所」）の跡地に、歴史・平和・科学教育を目的に「明治大学平和教育登戸研究所資料館」が設立されたのは、二〇一〇年三月二十九日。設立五周年を迎えた館では「紙と戦争」をテーマに企画展（二〇一四年十一月十九日～二〇一五年三月二十二日）、見学会を行うと共に、三月二十一日の最終日には、小林良生（よ

しなり）氏（元通産省工業技術院四国工業技術研究所・技術交流センター長）の記念講演会と同館館長の山田朗氏との対談が行われた。本企画では主に和紙の風船爆弾、洋紙の偽札技術が扱われたが、今回はそのうち小林良生氏の講演を中心に風船爆弾に絞ってお伝えする。



山田館長（左）と講演した小林良生氏（右）

と小林良生氏との対談が行われた。本企画では主に和紙の風船爆弾、洋紙の偽札技術が扱われたが、今回はそのうち小林良生氏の講演を中心に風船爆弾に絞ってお伝えする。

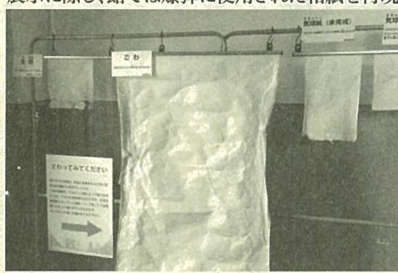
●風船爆弾開発の経緯

風船爆弾の開発は登戸研究所第一科が担うが、五段階ほどの経緯がある。



風船爆弾の1/10模型

第一段階（昭和八～二四年）斬新奇抜な着想を歓迎する前身の科学技術研究所所長の多田礼吉は、和紙製気球を兵器に採用。元陸軍、国際科学工業の近藤至誠は、気球試作用紙を求めて日本橋の小津商店に問い合わせるが、スベックに見合う紙が得られず、小川の細川紙に目を付ける。細川紙は那須楮を使い、軽くて細い丈夫な紙で気球にうつつけの上、隣の群馬県がコンニャクの産地で原料調達の際、館では爆弾に使用された和紙を再現



の産地で原料調達のし易さが気球用紙としての決め手となった。

第二段階（昭和二五～三七年）当初満州から対ソ・中国に宣伝ビラを撒く目的で、直径一・五～一・八メートルの小型のものを目指したが、昭和十六年、日米開戦後は防空用に径四～六メートルの研究に発展。

第三段階（昭和一七年）米軍による昭和十四年の東京、横須賀、神戸、名古屋のいわゆるドゥリトル空襲を機に、爆弾を積み潜水艦から攻撃する報復型の気球六段級のものに目標変更。第四段階（昭和二八～二九年）戦局で潜水艦が使えず、太平洋八千kmを越え、米本土に届く気球開発。上空五五度にも耐え、高度二万～二万二千を飛ぶことの出来る滞空二日半の気球の製造にめどが付き、研究体制を強化。

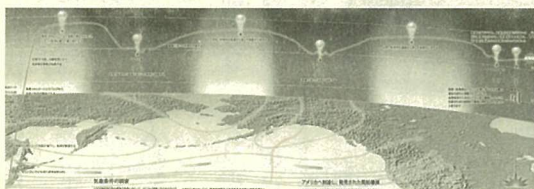
一方、昭和十七年、中小企業の生産体制の効率化を意図する企業整備令の元、紙業界では洋紙、和紙含め紙統制会社が作られ生産命令が伝達された。和紙業界では、高知、愛媛、埼玉、

鳥取、福岡、岐阜、石川の七県の和紙が指定され、うち七十%を四国の紙が担った。愛媛と高知は地元で風船爆弾の組立まで一貫作業で行っている。越前や美濃の一部は軍用紙を製造しており、風船爆弾用紙の製造は免れた。また、小田原製紙、日本紙業、巴川製紙、三菱製紙、高知製紙などの中堅製紙企業も紙の機械抄紙生産体制に協力。出来た気球は、径十センチ、気圧計とバラスト（重り）が連動し、重りを落下しながら、太平洋を渡る高度保持装置を装備した。浮力は高度千メートルで二八四kg。飛行速度は二五〇～三〇〇km/時、七十時間経つと自滅する機構であった。

第五段階（昭和一九～二〇年）放球場所は東海岸福島以南、鉄道沿いの条件から、茨城県の大津、福島県の勿来、千葉県の二宮に発射基地を建設。戦況芳しくない状況下で、牛疫ウイルスや細菌を搭載する計画は中止され、焼夷弾を積んだ気球は、昭和十九年十一月から翌二十年の四月までに、九三〇〇個が放球された。戦後の日米調査によると、ほぼ一割の二千発程度がアメリカ大陸に到達したと推定されている。

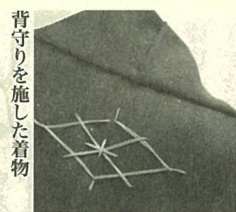
●気球に使われた和紙

一個の気球には、専用の簀がたで漉いた和紙三～四千枚が使用された。生紙は各産地によってサイズも厚さもまちまちだったので、王子製紙から引き抜かれ、後に偽札の製紙部門班長になる伊藤寛太郎は、洋紙の考え方を取り入れ、縦横比・強度の



太平洋横断作戦図（登戸研究所資料館作成）

ならないといけない。「背守り」は偶然近くの「昭和の暮らし博物館」で見つけたのですが、「かたち」に思いや意味が込められている点で「家紋」と似ているところがあるように思えます。先祖達は、着物の背縫いには縫い目があり、「目」があるので、魔物が入るのを防ぐと考えるようになりました。子供の着物は幅が狭く縫い目がないので、魔除けにシンプルな縫い取り、刺繍、アップリケのような押絵を縫いつけ、「目」を付けました。昔は子供の死亡率も高く、親の祈りが伝わります。昭和初期まで女学校でも教えられていました。この様な手仕事も復活させたいと思い、針と糸、練習用の台紙がセットになった「背守り練習帖」にまとめました。



背守りを施した着物

文様のワークショッップの様子と作品



地域の古い建物の文様をみんなで見し、その建物の価値を再認識する「たてもの文様」の活動も行っています。通気口や扉、天井の装飾などを「切り紙」にして文様採集をし、飾って、形の物語に耳を傾けてみます。目黒の庭園美術館はじめ、旧岩崎邸、自由学園明日館、鎌倉文学館などでワークショップを開催しました。コミュニティ活動などにも利用してはいかがでしょうか。

職人探訪

■全国でも珍しい手切りの技
越前和紙裁断業 中谷健二さん



も珍しい、こんな職種が越前に残っている。今回はこの中谷さんの仕事を紹介する。

●紙断ち職人の仕事

昭和二十年頃、父恵保(しげお)さんの代から「和紙裁断」の仕事が始めたというが、二代目の健二さんもこの仕事を続けてかれこれ四〇年になる。越前には、もう一軒、水島さんという家が手切りの仕事をしていて、健二さんの父は戦争から帰還後、水島さんの父に弟子入りし仕事を覚えた。紙断ち職人は木製の定規と紙切り包丁を携え、各漉き場に紙を切り回し、時間いくらかで「手間代」という報酬をいただく。

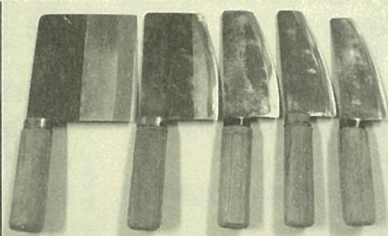
シンポジウムでの実演
https://youtu.be/ZL02ymWq6ws
にて動画もご覧いただけます。



健二さんは若い頃、京都で勤めた後、二十歳の時に郷里に戻り、父に付いて二ヶ月漉き場での裁断を見て回り、二ヶ月目からは見習い、三ヶ月目にはもう「二人で回ってこい」と言われた。父は懇切丁寧に指導はしてくれなかったから、自分なりに工夫を重ね、自力で紙切りのコツを少しずつ修得していった。紙切り包丁は、堺の刃物。定規はケヤキ製で、大紙、小間紙用など、四〜五種類ほどある。「化粧裁ち」といって、手漉きの紙の端をきれいに切り揃える。普通二五〇枚ほどを重ねて切るが、流し漉きのため縁が厚く、「紙の耳が高くなる。積み重ねると縁の厚みで、定規を当て、まっすぐに包丁をおろしても切り口が斜めになる。それを防ぐため、重ねる角度を微妙に調整し、定規に体重をかけ、刃先が丸い鋼製の包丁で、誤差を出来るだけ小さくするように少しずつ切っていく。漉き手の質の揺らし方の違いで、「耳」の高さはまちまち、紙の厚さや固さにも個性があり、各々の漉き場の紙を熟知していなければ、きれいに切ることができない。包丁を動かした跡が殆ど付かないのが良い切り口とか。透かし模様のある紙も、図柄を出来る限



紙に空気を乗せてを揃える



長年の使用ですり減った紙切り包丁

り揃えながら切る。巻いた紙の癖が残る襖紙などの紙揃えにも、紙に空気をうまく乗せ、いたわるコツがいくつもある。
二反百枚で、画仙紙の全判など二、三〇反切ると優に半日はかかる。一番忙しかった昭和五十年頃は、三、四〇軒ほどの漉き場や問屋さんを回っていました。休みは正月と盆二日だけ。一軒につき二、三時間の作業で、朝から夜の十時くらいまで、年間三六三日働きました。」と健二さんは振り返る。

●特殊な大きな紙を切る

家には、現在大きな裁断機械もあるが、機械漉きを行っている所では自前で裁断機械も入れるため、現在ではお客さんは手漉き紙のみを作っている所か、機械に入らないほどの大きな紙を切る時に限られる。手漉き工房の減少に伴って、年々仕事も減っていく状況だが、時にはここでしか切ることのできない場面にも出くわす。

一九九二年、福井県今立町(合併により現在は越前市)で、「子供の読書意欲の向上と、和紙職人の励みになるように」と和紙の絵本が制作された。ギネス登録こそしなかったが、恐らく当時世界一大きな絵本だ。縦三・二メートル×横二・二メートル、重さ約六二kgの絵本の紙を切る時、東京から呼び寄せた紙裁断の業者は機械にも入らない

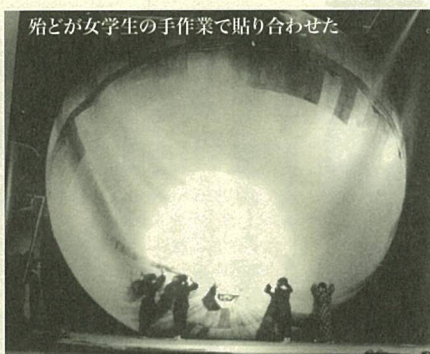


「紙すきおすまはん」
と巨大絵本を切る
先代恵保さん



戦時中の偽札作りも展示

軟化して折れたんだ。食糧事情の悪い時期、糊には食欲を減退する青色塗料が混ぜられたが、これは塗りがラを防ぐ方法でもあった。一球、当時のお金で二万円だったと言う。
戦時下利用された和紙技術のもうひとつの物語に、百五十名の参加者は熱心に聞き入っていた。



始どが女学生の手作業で貼り合わせた

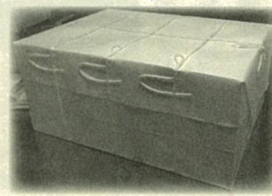
差の少ない規格を作った。サイズは一号から五号まで五種類、その紙の張り合わせ方法を六種類作り、どの産地の紙も組み合わせることが出来るようにした。又厚さも千枚単位の重さを決め、管理した。後に機械漉きをする際、抄紙機の丸網の上に繊維を通すと流れができ方向が付いてしまったため、繊維が並ばないよう邪魔板を入れて流れを乱した。

折りたたんで発射基地に運ぶため、強さだけでなく弾力性が必要だった。コンニャクをアルカリでゲル化し、グリセリンに浸し、

紙を互い違いにして、上半球は厚めの紙を四〜五枚、下半球は三枚、コンニャク糊で張り合わせた。球皮の水素ガス漏れ防止効果は抜群であった。作業は主に勤労奉仕で駆り出された女子学生の手作業だった。気球は製造後、

大きな紙にお手上げ状態だった。その時、父恵保さんが起き、しゅつしゅつと絵本の紙を切った。こんな仕事をしてくれる職人がいるというので一堂皆感嘆！福井県在住童話作家、藤下安子氏の作品「紙すきおすまはん」はこうして迫力ある和綴し本にされ、卯立の工芸館に展示することができた。

昔の紙の包装法
「奉書仕立て」



●「品格のある包装の「型」」
「昔は刀で切っていたのか？和本なども縁はきれいに切り揃えてあるので、僕らみたいな職業の人がいたらとは思いますが、なにしろ裏方の仕事で、記録には残っていないのです。」と言いながら、健二さんは、昔父や水島さんから習った紙の包装を、記憶をたよりに再現した「奉書仕立て」という包みを見せてくれた。江戸時代から伝承されてきたものであろうか？包装した中身の紙が分かるように、「一番上には同じ紙を載せ、白い紙でぐるりと包んで、白い紙紐で「結び」を施す。公家や殿様に納める上級の紙であった檀紙や奉書のこの包装は、きりつとしていて、清らかな品格があり、何とも美しい。明らかに美的な「型」があるようだ。一帳＝五十枚の紙を白い紙の帯で束ね、五百枚の紙を帯が互い違いに見えるように束ねる様も美しい。
「紐の跡が付くということと中身を表す上と下の紙がもつたないという理由で、この包装の仕方はすたれてしまったようです。恐らく私の代でこの仕事は最後になるので、歴史を感じるこの包み方を覚えていて欲しい。」と健二さんは少し寂しそうに語った。

■ユネスコ登録を目指す

「越前生漉鳥の子紙保存会」設立

昔から、美濃、土佐と共に和紙の三大産地であり、手漉き和紙のシェア、事業所数が日本一でありながら、ユネスコの無形文化遺産登録が見送られた越前和紙の職人達が追加登録を目指して、去る三月二七日、「越前生漉鳥の子紙保存会」（会長・柳瀬晴夫）を設立した。

ユネスコ登録には重文指定された保存団体があることが必要という。このような状況を受け、産地では数ある和紙の中から、レンブラントの版画作品に使われた可能性があり、中世から上質な紙の代名詞として「紙王」と呼ばれた、越前を代表する雁皮百分の生漉鳥の子紙に焦点を絞った。保存会の実績を査定するため、重文指定には五〜七年かかるが、長期戦で望む構え。

会設立の翌日、保存会のメンバーや児童などは、栽培が不可能とされている雁皮の苗木育成に成功した元県グリーンセンター勤務、樹木医の今井三千穂さんの指導の元、越前市岡本小学校や区所有の原料畑に、雁皮の苗四〇本を植樹した。

尚、レンブラント関連で交流の続いているオランダのレンブラントハウスでは六月、「越前和紙展」の開催も予定されている。



情報欄

●イベント情報

■神と紙のまつり(大掘り出し市)

時:2015年5月3日(日)~5日(火)
場所:和紙の里通り(越前市新在家町)
特設テント和紙販売、バザー、クラフト教室など

■大瀧神社・紙祖神 岡太神社春季祭礼

時:2015年5月3日(日)~5日(火)
場所:大瀧神社・岡太神社(越前市大滝町)

■和紙青年部企画展「X(かける)和紙」展

時:2015年4月22日(火)~6月8日(月)
場所:卯立の工芸館(越前市新在家町)
今年は大判の和紙がテーマです。
まつり期間中5月3日・4日はお茶会も開催。

■第35回越前陶芸まつり

時:2015年5月23日(土)~25日(月)
場所:越前陶芸村(越前町小曾原)
即売、イベント多数

■第44回金沢ペーパーショー2015

時:2015年6月19日(金)~21日(日)
場所:石川県産業展示館(金沢)
展示、体験、実演あり

●第7回越前和紙 七夕吹き流しコンテスト 【公募】のお知らせ

応募期間:2015年4月1日(水)~6月21日(日)
当日消印有効
詳細:事務局(TEL 0778-42-0016)又は
「越前和紙の里ホームページ」まで



●本号レポート「紙と戦争」シンポジウムで講演された小林良生氏の最新刊です。

-四国は紙國~四国和紙の里紀行~



日本の和紙技術、その現場を訪ねたガイドブックの四国編

2015年3月27日発行、美巧社、A5版、2,160円

-和紙の里紀行~続『和紙周遊』~



「紙の博物館(東京・北区)」の機関誌『百万塔』に掲載されたものに追加調査を施し再編したガイドブック全国編。

2015年3月27日発行、美巧社、A5版、2,160円

編集後記

「登戸研究所」(旧第九陸軍技術研究所)は、地形的に隔絶された台地にあった。ひっそり佇む弥心神社や実験に使われた動物の慰霊碑が印象的だった。「ヒットラーの偽札」という映画があったが、その映画さながらの作業がここで行われていたとは。偽札の紙作りに必要な水は多摩川から引き、生田浄水場を作った。現在でも川崎市の水源として使われているという。

季刊・和紙だより 第46号(2015年春号) 発行日:2015年4月25日 和紙だよりURL→<http://washidayori.jimdo.com/>

発行人:福井県和紙工業協同組合 石川浩 〒915-0234 福井県越前市大滝町11-11 TEL: 0778-43-0875 FAX: 0778-43-1142

編集所:Office YOMOSA 〒606-8225 京都市左京区田中門前町90 TEL: 075-712-8834 FAX: 075-702-6223 E-mail: m-yomosa@smail.plala.or.jp

編集人:右衛門佐美佐子・田中裕子

※無断での転写・転載はお断りします。